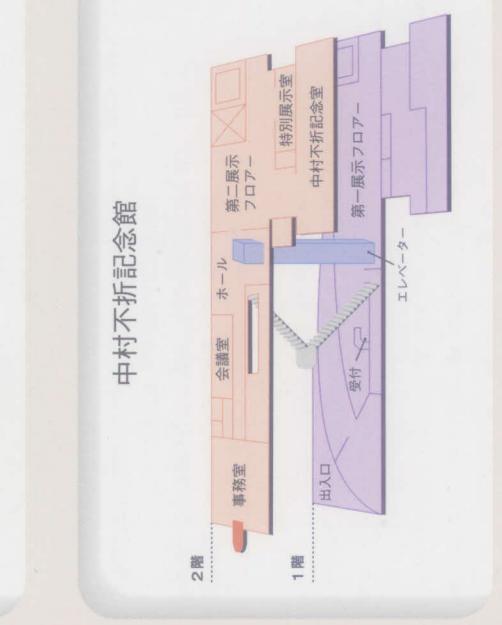


展示室案内

利用案内

【入館にあたつての注意事項】

- ・館内は撮影禁止です。
- ・展示品に手を触れないで下さい。
- ・展示品を汚すあるいはあるボールペン、万年筆、毛筆などの使用はご遠慮願います。
- ・館内での飲食及び喫煙はご遠慮下さい。
- ・館内への傘の持込みはご遠慮下さい(入り口の傘立てをご利用下さい)。
- ・展示室内のかさばる荷物の持ち込みはご遠慮願います(ロインロッカーをご利用下さい)。
- ・展示室内での携帯電話の使用はご遠慮下さい。
- ・ペットを連れての入館はご遠慮下さい。
- ・他のお客様のご迷惑になる行為はご遠慮願います。
- ・その他、係員の指示に従つて下さい。



【開館時間】 9:30～16:30（入館は16時まで）
【休館日】 月曜日（月曜が祝日・休日の場合は開館し、翌火曜に休館）
年末年始・展示替期間等

【入館料】 一般・大学生 500円（300円）
高・中・小学生 250円（150円）
※（ ）内は20名以上の団体料金
※障がい者手帳または特定疾患療受給者証をご提示の方
及びその介護者は無料

【住所】 東京都台東区根岸2-10-4
【電話】 03(3872) 2645
【ホームページ】 <http://www.taitocity.net/zaidan/shodou/>
【交通】 JR鷺谷駅北口下車 徒歩5分
JR・京成電鉄 日暮里駅南口下車 徒歩10分
台東区循環バス「北めぐりん」
「入谷区民館根岸分館（書道博物館）」下車 徒歩3分
※駐車場はありません





書道博物館創設者 中村不折について

書道博物館は、洋画家であり書家でもあった中村不折(1866-1943)が、その半生40年あまりにわたり独力で蒐集した、中国及び日本の書道史研究上重要なコレクションを有する専門博物館である。殷時代の甲骨に始まり、青銅器、玉器、瓦当、鑄鑑、瓦、陶瓶、封泥、壇印、石經、墓券、仏像、碑碣、墓誌、文房具、碑拓法帖、経巻文書、文人法書など、重要文化財12点、重要美術品5点を含む東洋美術史上貴重な文化財がその多くを占めている。こうしたコレクションと、昭和11年11月に開館した当初の博物館建設に伴う一切の費用は、すべて不折自身の絵画や書作品の潤筆料から捻出した。その偉業は日本中書道史上においても特筆されるべきものである。

こうして書道博物館は、開館以来約60年にわたって中村家の手で維持・保存されてきたが、平成7年12月、台東区に寄贈された。そして平成12年4月に再開館したのが現在の台東区立書道博物館である。

書道博物館は、既存の建物である本館と、寄贈後新たに建設した中村不折記念館からなる。本館には金石学に密接な関係のある、文字の刻まれた、あるいは書き込まれた収蔵品を常設展示しており、漢字の書法や文字の歴史をたどる上で非常に重要な資料を目にすることができます。書道という紙本墨書の類を考えがちであるが、それらの原点である金石関係の文字資料を数多く収蔵していることが、当館の大きな特色ともいえるだろう。

中村不折記念館では、碑拓法帖、経巻文書、文人法書等の類を、テーマに基づいた年4回の企画展・特別展で紹介している。また、中村不折記念室を設け、不折の作品やその関係資料を展示している。



フセツくん

中村不折は、明治・大正・昭和にわたり、洋画界と書道界において大きな足跡を残した人物である。画家を志した不折は、小山正太郎(1857-1916)の薰陶を受けた後、フランスのアカデミー・ジュリアンに入學し、ジャン=ポール・ローランス(1838-1921)の指導のもと、約4年間かけて人物画を徹底して学び、緻密な構図をベースに躍動的で力強い写実主義を確立した。帰国後は、太平洋画会の会員となり、展覧会に毎年出品する一方で、文部省美術展覧會(文展)では審査員をつとめ、帝国美術院会員に任命されるなど、洋画界での活動は実にめざましいものであった。太平洋画会研究所においては、後進の育成にあたり、後にその校長を務めるなど、教育者としても大いに貢献した。

ところで、洋画家として出発した不折が書道研究に傾倒した最大の契機は、明治28年正岡子規とともに日清戦争従軍記者として中国へ赴いたことにある。この機会に約半年をかけて中国、朝鮮半島を巡遊し、後の彼の書に少なからぬ影響を与えた「龍門二十品」や「淳化閣帖」などの拓本をはじめ、漢字成立の解明に寄与する考古資料を目にし、それらを日本へ持ち帰ることを得たのである。書においては、こうした書の古典から多くを学び、なかでも北派の書を根底とした、不折独自の大膽で斬新な書風を開拓した。明治41年に書かれた、いわゆる“不折流”のデビュー作となった「龍眠帖」は、書道界に一大センセーションを巻き起こした。印象的で一風変わった不折の書は、そのデザイン性の高さと親しみやすさから、店名や商品名のロゴに用いられることが多かった。現在、我々が身近で目にすることのできる不折揮毫のものとして、「新宿中村屋」の看板文字、清酒「真澄」や「日本盛」のラベル、「神州一味噌」、「筆匠平安堂」などがある。

また、明治の文豪たちとの親交も深く、夏目漱石「吾輩ハ猫デアル」の挿絵や、島崎藤村「若菜集」、伊藤左千夫「野菊の墓」などの装幀・挿絵も手がけている。

大正 4年	5月 4日	中根岸より現在の上根岸125番地へ移転。邸内玄関への通路左側に陳列室をつくり作品や瓦当、埴等を陳列。
大正 12年	9月 1日	関東大震災。中村邸は無事。
大正 14年		庭内に収蔵庫を建設。紙本墨書類を収藏。
昭和 8年		春秋左氏伝残巻、鄭玄注本論語残巻、三国志・呂志巻第一残巻、抱朴子内篇巻第一残巻、荘子天運篇第十四・知北遊篇第二十二・搜神記 以上8点を国の文化財に指定(旧国宝、現在重要文化財)。
	1月 23日	獸首鏡、神獸鏡を国の重要美術品に指定。
	7月 25日	博物館前身の建物を建設。金石館と命名。
	昭和 9年	戈2点、永寿二年三月捐を国の重要美術品に指定。
	昭和 10年	入口、事務室、展示室を増設。財団設立申請。
	6月 16日	東洋学者で、コレージュド・フランス教授のボル・ペリオ博士が来訪。
昭和 11年	1月 8日	財団法人許可。
	2月 29日	財団法人登記。
	1月 11日	書道博物館開館。初代館長に創設者中村不折が就任。
	1月 12日	東京ステーションホテルにて博物館竣工祝賀会開催。
昭和 15年	5月 3日	登記人代表は河井荃淵 參加者 110名。
	2月 29日	法句譬喻經卷第三残巻、仏說菩薩藏經卷第一残巻、摩訶般若波羅蜜經卷第十四残巻、宋版十輪尼律巻第四十六 以上4点を国の文化財に指定(旧国宝、現在重要文化財)。
	6月 6日	中国大使植民謹が博物館來訪。
昭和 16年	1月 10日	中国大使植民謹が博物館來訪。
昭和 18年	6月 6日	初代館長中村不折逝世。第2代館長として、不折の娘中村丙午郎就任。太平洋戦争のため、国の指示により指定文化財の収蔵品を中心に一部奥多摩方面へ疎開。
昭和 20年	4月 13日	空襲で上根岸一帯が焼け、中村邸は居宅と藏が焼失。フランス留学時代の手紙等、不折自身に関する資料の多くが灰燼に帰したが、敷地内の博物館と収蔵庫は残り、収蔵品は全て無事。
昭和 27年		博物館法制定により、博物館法指定博物館の第3号となる。中村不折邸として都の史跡に指定。法改正により國宝指定12点が重要文化財指定となる。
平成 2年	1月 21日	第2代館長中村丙午郎逝世。第3代館長中村初子就任。
平成 7年	9月 10月 12月	財団法人を解散し、台東区への寄付を決定。
平成 9年	1月 10月	財団法人へ書道博物館開館。
平成 10年	6月 10月	書道博物館台東区寄贈記念「中村不折展」を浅草公会堂にて開催。
平成 11年	8月	中村不折記念館完成。
平成 12年	4月 7日	台東区立書道博物館開館。

本館では、金属・石・陶器などに見られる漢字資料を展示しています。中村不折記念館での企画展・特別展および調査などにより、展示の内容を一部変更することがありますのでご了承下さい。

【 1F 第一展示室 】 —大型の作品—

石碑・刻石

石に文字を刻み、特定の人物の業績や歴史的な出来事を後世に伝える営みは古くから行われました。後漢時代では題額・本文・台座をそなえる石碑の様式が確立します。この様式でないものは刻石といいます。「劉命刻石」は前漢時代、「家土断碑」は断片ではありますが、後漢時代の貴重な作例です。

石 経

儒教の經典を刻んだ石碑のことを石經といいます。儒教は前漢時代に公式の学問になったことから、写し間違による經典の文言の間違いや誤解を正して世に示す必要がありました。「三体石經」は、一つの字につき三つの書体（古文・篆書・隸書）が刻まれた石經です。

造像碑

仏教や道教の像が彫刻された石碑です。北魏時代後半頃から現れはじめ、仏龕（仏像を安置するくぼみ）が彫刻されたものもつくられるようになりました。「高洛周等造像碑」はその代表的な作例で、側面や背面には関係者の氏名や建立の経緯などを述べる銘文が刻まれています。

墓 表

故人を埋葬した墓のしるしとして建てた石で、「呂憲墓表」は五胡十六国時代の貴重な作例です。その字は、隸書から楷書へと移り変わる姿で、隸書の構えに楷書の筆法（ハネ）が見られます。

仏 像

仏の姿を彫刻した仏像は、1世紀末頃のインドでつくられ始めたと考えられています。中国の仏像彫刻は、ガンダーラ・インド彫刻の影響を受けながら発達し、次第に独自の様式を形成していきました。「三尊仏石像」「阿弥陀仏坐像」は、台座に建立のいきさつを述べる銘文が刻まれています。



三体石經残石（第五石・部分）



呂憲墓表（部分）



阿弥陀佛坐像（部分）

【 1F 第三展示室 】 —古代中国の遺跡から—

玉器

古代中国で珍重された、文様や光沢を持つ肌触りのよい美石を玉といいます。翡翠ともいい、儀礼などに使用され、さまざまな形に加工されました。

陶文

陶器の破片に見られる文字を総じて陶文といいます。印を押すが、直接刻んで文字を表します。

俑

墓に副葬するために陶器などで作られた人形です。死後の世界で故人のお供をすると信じられました。

仏像

第三展示室の仏像は小型のものです。台座などに制作の由来や経緯が刻まれています。

仏塔

仏塔は信仰の対象としてつくられたもので、釈迦の遺骨(仏舍利)をおさめた墓を起源とします。浮図ともいいます。造塔の功德を信じる者たちの身分に応じて大小の仏塔がつくられました。「鮑墓造塔記」は北魏時代のもので、銘文が刻まれた台座部分のみが現存しています。

墳

レンガと同じく、粘土を成型して焼いてつくる建築資材で、建造物や墳墓の構築・装飾に用いられました。その起源は西周時代と考えられており、秦・漢時代以降は広い地域で作られました。

大塼(大型のもの)、空塼(中空のもの)のほか、仏塔の建立を記念してつくられた塼、墳墓の造営の経緯を述べる塼や画像塼などもあります。なかでも「急就章塼」は、小児の文字学習のための文章『急就章』の冒頭部分が刻まれたもので、後漢時代の日常的な筆記の様子を示す貴重な資料です。

瓦当

ひらがわら 平瓦と平瓦との縫目間に置かれる筒瓦の先端を瓦当といいます。建物の屋根をふく瓦の起源は殷・周時代と考えられています。周時代の瓦当は半円形で獸文が施され、秦・漢時代以降は円形となり、縁起の良い語句を装飾された文字で施すようになりました。

石經

第三展示室では、現存最古の石經の作例として知られる「熹平石經」を展示しています。建立後、度重なる戦乱によって散失しましたが、近代になって残石が出土しました。当時の正式書体であった隸書で刻まれています。

墓誌

故人の出生・官位・功績などを述べた石や磚を墓誌といいます。石碑の建立が禁じられた三国魏～西晋時代頃から発達して北魏時代に様式が定まり、唐時代にかけて流行しました。肉筆の作例もあります。

【 2F 第四展示室 】 —漢字のはじまり—

甲骨文

甲骨文は、殷時代後期の遺跡である殷墟(河南省安陽市)から出土した亀の腹甲、あるいは牛の肩胛骨などに刻まれた占いの記録であり、現存最古の漢字資料です。

漢字は、もののすがたをかたどる字(象形/牛・羊・魚)、ものの位置を示す字(指事/上・下・本)

字がつくられ、それらの意味を合わせてつくる（会意／歩・北）、へんとつくりを合わせる（形声／洞・桐・銅）ことで数を大きく増やしました。

せいどうき 青銅器

古代中国において、青銅（銅を主成分とする合金）が使用されるようになるのは今からおよそ4500年前。そこから1000年ほど経過した殷時代後期の青銅器は技術・量ともに極めて高い水準に達し、それらは神に食事や酒を捧げるための神聖な器（彝器）として使用されました。周時代になると、王との結束の証としての意味も持つようになり、制作の経緯を述べる銘文が長文化します。彝器のほかに、あわせて青銅製の武器も展示しています。

食器（煮炊き用）… 鼎・甗・鬲
酒器（貯蔵用）… 尊・壺・卣
水器… 盆・洗
武器… 剑・戈

食器（盛食用）… 館・簠
酒器（温酒用）… 爵
樂器… 鐙

【2F 第五展示室】 —文房具・鏡鑑・墓券—

まくわく 墓券

墳墓を築く際、その土地に埋めて権利を示すためのものです。現実生活における土地の売買と同様、故人の住居である墳墓の売買契約の証明として、または故人の靈魂を慰めることを目的としてつくられました。材質は主に鉛・鉄・玉・博。銘文は、刻まれたものと、漆などで記されたものがあります。

とうがい 陶瓶

墳墓に副葬された陶製の甕です。その側面には漆による肉筆の文字が見られ、そのほとんどが故人の埋葬を地下（死後の世界）の役人に伝える文章であると考えられています。展示しているのは漢時代のもので、古代の日常的な文字の姿を示す重要な資料です。

きょうかん 鏡鑑

鏡鑑は古くから姿見や祭祀に用いられ、鏡面の反対側には聖人や神獸などの装飾が施されました。

じいん 墨印

戦国時代、印章はすべて「璽」と呼ばれ、王と臣下との従属関係を規制するために、この璽を用いて官吏を任命しました。秦時代になると天子のものを「璽」と称し、臣下のものを「印」と称します。漢時代では、天子および諸侯王には「璽」、丞相・太守・將軍のものは「章」あるいは「印章」、それ以下の官のものを「印」と称しました。秦・漢時代の印には緻密で優れた作品が多く、篆刻藝術の手本として尊ばれています。古くは封印として粘土に押されていましたが、隋時代頃から朱で紙に押印する形式となり、大型化しました。明時代になると、文人自らが印をつくる篆刻藝術が興ります。

すみ 墨

文房四宝の一つです。古くは墨丸（煤・黒鉛などを固めたもの）を研磨石で細かく砕き、水・膠（動物性たんぱく質）・漆などで溶いて墨汁を得ていました。唐時代になると、煤と膠を練って型入れして乾燥させる、今とほとんど変わらない墨がつくられるようになりました。明時代では名工が現れます。

すい てき 水滴

墨をする際、硯に水を少しづつ注ぐための道具です。

刀 線

古代中国において用いられた小刀です。古くは専ら字を刻むために用いられました。のちに木簡・竹簡類への墨書が普及すると、訂正箇所を削る道具として用いられるようになりました。刃の反対側には、紐を通して腰に下げる輪があります。

文 研

文房四宝の一つで墨をする道具です。唐時代初め頃までは陶製の硯が主流でした。のちに端溪（広東省）や歙州（安徽省）などから採取された石材を用いて優れた硯がつくられるようになりました。

【 第五展示室 】 一日本の金石文一

板 碑

故人の供養追善の目的で建てられた塔婆（石塔）の一つです。薄い板状の石を用いていることから板碑と呼ばれます。埼玉県を中心とする関東地方では秩父青石と呼ばれる緑色泥岩が用いられ、青石塔婆とも呼ばれました。

瓦 経

粘土に経文を刻み、焼いたものです。これを経塚に埋めて奉納し、来世の平穏を祈願しました。

経 筒

経巻を埋めて奉納するための容器です。末法思想が蔓延した平安時代後期から盛んになりました。

柄香炉

仏具の一つで、香を焚く道具です。仏壇の前の机に置かれました。文字が見られるものもあります。

磬

上部の二つの穴にひもを通して吊るし、打ち鳴らす仏具です。形は主に「へ」字型をしています。殷時代からの歴史を持つ祭祀用具で、玉や石板で作った磬を並べて吊るし、打ち鳴らしました。のちに仏教に採り入れられ、仏壇の前に置かれた机（礼盤）の右側の磬架に架けて打ち鳴らすものとなりました。

磬 口

寺などの正面軒先に掛けられ、手前に垂れる布縄で打ち鳴らして祈願をするための道具です。

【 庭 園 】 —不折像と元禄期の御隠殿跡、そして明治の蔵—

中村不折の銅像は、不折の還暦を祝して門人たちにより贈呈されました。作者は、不折が太平洋美術学校長を務めていた時の弟子で、のちに同校長を務めた堀進二（1890～1978）です。

かつて寛永寺の貫主の御隠殿跡でもある中庭では、桜や銀杏をはじめ、四季折々の景色がご覧頂けます。かつてはこの場所で不折が大作を制作するため、大筆を執ったこともあります。

庭園の奥には、平成23年に発見された中根岸（現・根岸3丁目）の中村不折旧宅（明治32年から大正4年まで居住）の蔵が移築・復原されています。

みんなが見たい優品展 パート18 中村不折コレクションから

清朝碑学派の書

展示一覧

※今後の諸事情により、会期や展示期間、展示作品などが変更になることがあります。

あらかじめご了承ください。



令和4年 3月15日(火) ~ 6月12日(日)

会期中、一部展示替えがあります。

前期 : 3月15日(火) ~ 4月24日(日)

後期 : 4月26日(火) ~ 6月12日(日)

中村不折(1866~1943)コレクションから、清時代に碑学を学んだ人たちの書、そしてその原点となった石碑や青銅器の拓本などを展示します。また、碑学の影響を受けた中村不折の書や研究の足跡をたどり、日中の文化交流を紹介します。

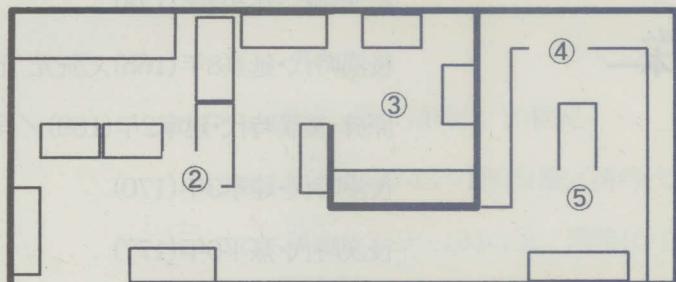
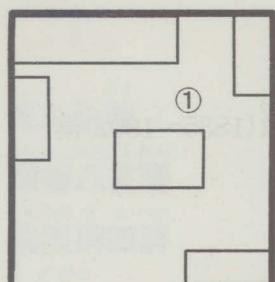
※東京国立博物館の東洋館8室では、3月1日(火)から4月10日(日)まで「近代の書」が開催され、清朝碑学派の書を展示します。また4月12日(火)から6月26日(日)まで「石刻の書—隸書から楷書へ—」が開催されます。合わせてご覧下さい。

中村不折記念館

展示のごあんない

1F

2F



- ① 碑学派前夜
- ② 碑学派と金石の書
- ③ 碑学派と金文コレクション
- ④ 碑学派の書画
- ⑤ 日本への影響

【 1F 大型展示ケース 】

前

えいかくめい
瘞鶴銘

後

こうぶしょうぐんひ
広武將軍碑
ていぎじょうひ
鄭羲上碑とうこうけい
陶弘景(456~536)筆／梁時代・天監13年(514)おうほうこう
翁方綱(1733~1818)他 跋おうほこう
五胡十六国時代(前秦)・建元4年(368)とうどうじょう
鄭道昭(?~516)筆／北魏時代・永平4年(511)

【 1F 第一展示フロア 】

碑学派前夜

停雲館帖

じゅんか かくじょう
淳化閣帖

こしほん
—顧氏本—

文徵明(1470~1559)編／明時代・嘉靖39年(1560)

原本:王著(10世紀頃)編／北宋時代・淳化3年(992)

明時代・嘉靖45年(1566)

姜宸英(1628~1699)筆／清時代・17世紀

金農(1687~1763)筆／清時代・18世紀

鄭燮(1693~1765)筆／清時代・18世紀

乾隆帝(1711~1799)勅撰／清時代・乾隆14年(1749)

阮元(1764~1849)編／清時代・嘉慶9年(1804)

臨王羲之尺牘冊

校官碑題簽

蘭竹圖軸

『西清古鑑』

『積古齋鐘鼎彝器款識』

【 2F 第2展示フロア 】

碑学派と金石の書

石鼓文—安国本—

杭州府学本石鼓文

戦国時代・前5~前4世紀

原石:戦国時代・前5~前4世紀

阮元 模／清時代・嘉慶2年(1797)

李斯(?~前208)筆／秦時代(前219)

前漢時代・地節2年(前68)／趙之謙(1829~1884)題

後漢時代・永平9年(66)／吳昌碩(1844~1927)他 跋

後漢時代・建和2年(148)

後漢時代・延熹8年(165)／阮元 他 跋

原碑:後漢時代・建寧2年(169)／吳大澂(1835~1902)模

後漢時代・建寧3年(170)

後漢時代・熹平6年(177)

後漢時代・中平元年(184)以後／張祖翼(1849~1917)題

後漢時代・中平3年(186)／羅振玉(1866~1940)跋

後漢時代・2世紀／沈樹鏞(1832~1873)他 跋

琅邪台刻石

揚量買山記

開通褒斜道刻石

石門頌

後 西嶽華山廟碑—長垣本—

郭有道碑

夏承碑

尹宙碑

後 孔褒碑

張遷碑

前 安陽四漢碑

三国時代(魏)・黃初元年(220)以後
北魏時代・太和22年(498)
北魏時代・景明元年(500)頃
北魏時代・景明3年(502)
北魏時代・景明年間(500~503)

受禪表

後 始平公造像記

前 楊大眼造像記

孫秋生造像記

後 魏盡藏造像記

前
前
後
後
校碑図

ろんけいしょし
論經書詩
 ていぎかひ
鄭羲下碑
 ちょうもうりょうひ
張猛龍碑
 こうていひ
高貞碑
 こうひづ
校碑図

【 2F 特別展示室 】

碑学派と金文コレクション

後
大孟鼎銘
 こつていめい
簋鼎銘

前
大克鼎銘
 後
頌殷銘
 前
兮甲盤銘
 後
齊侯罍銘
 前
石榷銘
 前
臨大孟鼎銘軸
 後
臨散氏盤銘軸

鄭道昭 筆／北魏時代・永平4年(511)

鄭道昭 筆／北魏時代・永平4年(511)

北魏時代・正光3年(522)

北魏時代・正光4年(523)

張熊(1803~1886)筆／清時代・光緒3年(1877)

西周時代・前11世紀頃

西周時代・前9世紀

楊峴(1819~1896)、吳大澂 跋

西周時代・前9世紀／羅振玉 考訖

西周時代・前9世紀

西周時代・前9~前8世紀

戦国時代・前5~前3世紀

秦時代(前221)／^{たんぽう}端方(1861~1911)他 跋

吳大澂 筆／清時代・19~20世紀

吳大澂 筆／清時代・19~20世紀

【 2F 中村不折記念室 】

碑学派の書画

後
行書文語軸

後
隸書八言聯

前
臨漢碑四屏

後
花卉図冊

後
隸書七言聯

前
行書七言聯

前
隸書八言聯

後
隸書七言二句軸

前
隸書蒙恬將軍碑軸

後
行書蘇軾七言絶句軸

後
篆書七言聯

後
秋園妙趣図軸

阮元 筆／清時代・19世紀

鄧石如(1743~1805)筆／清時代・18~19世紀

錢泳(1759~1844)筆／清時代・19世紀

吳熙載(1799~1870)筆／清時代・同治9年(1870)

何紹基(1799~1873)筆／清時代・19世紀

何紹基 筆／清時代・19世紀

楊峴 筆／清時代・19世紀

俞樾(1821~1906)筆／清時代・19~20世紀

楊守敬(1839~1915)筆／明治15年(光緒8年)／1882

楊守敬 筆／清~民国時代・19~20世紀

吳昌碩 筆／清時代・宣統2年(1910)

吳昌碩 筆／清~民国時代・19~20世紀

前 びやくれん ずじく
白蓮図軸
そうしょせきとくさつ
草書尺牘冊
りんしゅくこうほ きめいじく
臨叔向父殷銘軸

吳昌碩 筆／民国8年(1919)

康有為(1858~1927)筆／清~民国時代・19~20世紀

羅振玉 筆／清~民国時代・19~20世紀

日本への影響

さんぼうし ひ
爨宝子碑
しゅたいりん ぼしめい
朱岱林墓誌銘

東晉時代・義熙元年(405)／楊守敬 跋

北齊時代・武平2年(571)筆

吳昌碩 題簽、康有為 跋

中村不折 筆／明治41年(1908)

日下部鳴鶴(1838~1922)筆／大正3年(1914)

原著:康有為

中村不折・井土靈山(1859~1935)共訳／大正5年(1916)

かわいせんろ 河井荃蘆(1871~1945)筆・大正14年(1925)

中村不折 著／昭和8年(1933)

中村不折 筆／昭和18年(1943)

中村不折 筆／明治~昭和・20世紀

中村不折宛書簡

ひじょうだん
『碑帖談』

前 そうしょしちごんぜつくじく
草書七言絶句軸
後 れいしょ ごごんぜつくじく
隸書五言絶句軸

【関連グッズのご案内】

《図録》『清朝書画コレクションの諸相 一中村不折・高島槐安収集品を中心に一』 1,200円

《図録》台東区立書道博物館図録 2000円

《図録》『画家・書家 中村不折のすべて』 3,000円

《原寸複製》中村不折「龍眠帖」 3,000円

《拓本複製》「石鼓文一安国本一」 1,500円

《拓本複製》李斯「泰山刻石一百六十五字本一」 1,500円

《拓本複製》「開通褒斜道刻石」 1,500円

《拓本複製》「張遷碑」 2,000円

《拓本複製》「淳化閣帖一夾雪本一」(第七) 2,000円

当館受付にて販売しております。通信販売も受け付けておりますので当館ウェブサイトをご覧ください。

本館(東京都指定史跡)

書道博物館本館(第1・3・4・5展示室)では、玉器・陶器・瓦当・石碑・墓誌・仏像・甲骨文・青銅器・璽印など、日本・中国書法史上特に重要な紙本以外の金石類に見られる文字資料を常設展示しています。

*このパンフレットの複写及び文章、画像の転載は固く禁じます。

台東区立書道博物館

中村不折年譜

※「」は中村不折コレクション
《》は油彩画作品

明治45(大正元)年

慶応 2年 1歳	7月10日江戸京橋東湊町（現中央区新川）に生まれる。	47歳	河東碧梧桐らと龍眠会を結成。揮毫帖『蘭亭序』刊行。
明治 3年 5歳	名は鉢太郎。（昭和3年、不折に改名）	49歳	東京大正博覽会に《廓然無聖》他出品。
17年 19歳	維新の混乱を避け、一家をあげ母方の郷里高遠へ移住。 幼少より絵を好み、物の形を写すことを楽しみとした。 北原安定に漢籍、真壁雲卿に南画、白鳥拙庵に書を学ぶ。 西高遠学校受業生（代用教員）となる。	4年 50歳	第8回文展に《卞和璞を抱いて泣く》他出品。
19年 21歳	西伊那部学校の助教となる。	5年 51歳	下谷区上根岸125番地（現在根岸2丁目）に転居。 著書『芸術解剖学』、揮毫帖『赤壁賦』刊行。
20年 22歳	飯田小学校で図画・数学の教師となる。 夏期休暇を利用して河野次郎に洋画の初步を学ぶ。	6年 52歳	画集『不折山人丙辰漫墨』第1集・第2集刊行。
21年 23歳	4月上京。画塾・不同舎に入門。小山正太郎に師事。	7年 53歳	画集『不折山人丙辰漫墨』第3集刊行。
23年 25歳	第2回明治美術会展に水彩画3点を出品。	8年 54歳	著書『芸術解剖学』、揮毫帖『草書千字文』『草書千字文』刊行。
24年 26歳	油彩画を始める。現存する最初の作例《自画像》制作。	9年 55歳	第9回健筆会展に《臨瀟真卿裴將軍詩》出品。
26年 28歳	第5回明治美術会展に《憐れむべし自家の写生》他出品。	10年 57歳	第10回文展に《陳蘭亭図》他出品。
27年 29歳	正岡子規と出会い、『小日本』新聞の挿絵を担当。同紙126号に俳句が掲載され、はじめて“不折”の名を使用。	11年 58歳	第2回帝展に《陳鶯鷗外没、遺言により不折が墓碑銘を揮毫》。
28年 30歳	日清戦争に子規とともに記者として従軍。	12年 58歳	7月9日森鷗外没。9月1日開東大震災がおこる。
29年 31歳	堀場いとと結婚。日本新聞社に入社、引き続き挿絵を担当。	13年 59歳	第5回帝展に《始制文字》出品。
30年 32歳	島崎藤村『若菜集』刊行。その装幀、挿絵を担当。	14年 61歳	第7回帝展に《桂樹の井》他出品。
31年 33歳	島崎藤村『一葉舟』刊行。その装幀、挿絵を担当。	昭和 2年 62歳	著書『禹域出土墨宝書法源流考』出版。
32年 34歳	第10回明治美術会展に《淡煙》《紅葉村》出品。	4年 64歳	門人などより還暦寿像（堀進二作）を贈られる。
34年 36歳	翌年『紅葉村』はパリ万国博で褒賞。	5年 65歳	太平洋美術学校が開校、初代校長に就任。
35年 37歳	下谷区中根岸31番地に住居・画室を新築し転居。	6年 67歳	顔真卿「自書告身帖」を購入。
37年 39歳	6月フランス留学。ラファエル・コランの教えを受ける。	7年 67歳	書道博物館建設に着手。
38年 40歳	島崎藤村『落梅集』刊行。その装幀、挿絵を担当。	8年 68歳	書道博物館の建物が完成。
40年 42歳	アカデミー・ジュリアンに転じローランスの指導を受ける。	9年 69歳	画集『不折山人写生帖』『十二支帖』刊行。
41年 43歳	ジュリアン画塾のコンクールで入賞。	10年 70歳	帝国美術院改組、帝国美術院会員となる。
	沼田一雅、岡精一と共にムードンにロダンを訪問、署名入りのデッサンをもらう。	11年 71歳	書道博物館、文部省より財团法人として認可される。
	帰国。太平洋画会会員となる。	12年 72歳	11月3日書道博物館開館式。
	夏目漱石『吾輩は猫である』『漾虛集』の挿絵を描く。	13年 74歳	帝国芸術院会員となる。
	日本新聞社を退社、朝日新聞社の社員となる。	14年 75歳	第3回太平洋画会、第6・7室に不折回顧記念特別陳列が設けられ、回顧陳列65点。
	代表作《建国頌業》を東京勧業博覽会に出品。（《建国頌業》はのちに「淳化閣帖一夾雪本一」と交換される）	15年 75歳	《廓然無聖》などを文部省に寄贈。
	第1回文展審査委員を命じられる。	16年 76歳	紀元2600年奉祝展覽会・前期に《湖畔》出品。
	揮毫帖『龍眠帖』刊行。前田黙鳳らと健筆会を結成。	17年 77歳	中国大使・褚民誼が書道博物館を見学。
		18年 78歳	第5回文展に《眺望》出品。
			6月6日夕刻、脳溢血のため急死。
			6月10日中根岸永称寺にて告別式。多摩靈園に埋葬。